

【8】 死と墮地獄

[0] 最後に提婆達多の死に関する事項を調査する。

[1] 一般に提婆達多は生きながら地獄に墮ちたとされている。この地獄に墮ちたこと以外に提婆達多の死を語る資料は存しない。

[1-1] 今まで紹介してきた律蔵関係の文献では、破僧は地獄に墮ちる罪であるとされるけれども、破僧したために提婆達多が現実に地獄に墮ちたという記述はそう多くはない。「律蔵」の破僧に関する記述の中で、提婆達多の地獄墮ちに関して記述するものは以下の通りである。B文献である『根本有部律』も含めた。

- (1) 八非法・三非法に覆われ、心とらえられた提婆達多は悪趣地獄に墮ちて1劫住して救われぬ (āyāyiko nerayiko kappattho atekiccho)。Vinaya (vol. II pp.202~203)
- (2) 提婆達多は賢者と称され、自ら修した者と尊敬され、名声は赫々たるものであったと聞いている。彼は放逸に耽り如来を襲撃して四つの門を持つ恐ろしい無間地獄に墮ちた (avīcinirayaṃ patto catudvāraṃ bhayānakam)。Vinaya (vol. II p.203)
- (3) 仏は「有八非正法、纏縛覆障消滅善心。提婆達多趣於非道在泥犁中一劫不救」と説かれた。『四分律』(大正 22 p.909 中)
- (4) 舍利弗・目連が500比丘を引き連れていったと聞いたとき、調達は「便大怖懼熱血從鼻孔出。即以生身墮大地獄」。『五分律』(大正 22 p.164 下)
- (5) 世尊は八邪法などの仏法僧戒を説かれ後、調達の過罪惡道分を説かれ、「當墮阿鼻地獄一劫壽不可救」といわれた。『十誦律』(大正 23 p.265 下)
- (6) 提婆達多は爪の間に毒を塗り、世尊を殺そうとしたとき火に包まれた。そのとき深心に「今日我身乃至徹骨於薄伽畔至心歸伏」と唱えたので、「現身墜墮無間無隙捺落迦中」したけれども、世尊は「提婆達多善根已續。於一大劫生於無隙大地獄中。其罪畢已後得人身。展轉修習。終得證悟鉢刺底迦佛陀。名爲具骨」と授記された。『根本有部律』「破僧事」(大正 24 p.149 下)

以上から知られるように、生きながら地獄に墮ちたとするものは(4)と(6)のみであり、他は破僧が地獄に墮ちる悪業であることを説くのみである。

したがって説話伝承としても、提婆達多が破僧を行ったときにすぐさま地獄に墮ちたのではなく、地獄に墮ちたとしてもその以降のある時点で命終わるときということになるのであろう。

[1-2] 上に紹介した破僧に直接関連するのではなく、一般的記述の中に提婆達多が地獄に墮ちる、ないしは落ちたとする資料も多い。これには次のようなものがある。もっともこの背後に破僧があるのは言うまでもないが、この他にも五逆罪としての出仏身血や、あるいは阿羅漢殺しが関連していることが想像される。以下はA文献資料である。

- (1) ニガンタ・ナータプッタはアバヤに、如来は他人の好まない言葉を語らないというなら、提婆達多に対して世尊が「提婆達多は悪趣・地獄に1劫住して救うことができない (āpāyiko nerayiko kappattho atekiccho)」と説かれたことは矛盾するではないかと言って、議論せよとけしかけた。MN.058 *Abhayarājakumāra-s.* (「無畏王子経」vol.

I p.392)

- 〈2〉世尊は阿難と一人の比丘に「提想達哆以放逸故墮極苦難。必至惡處生地獄中。住至一劫不可救濟。それは提想達哆には一毛ばかりの白浄法もないからである」と説かれた。『中阿含』112「阿奴波経」（大正01 p.600中）
- 〈3〉比丘たちよ、三の悪法によって心が征服された提婆達多は悪趣・地獄に1劫住して救うことができない (āpāyiko nerayiko kappatṭho atekiccho) 。*Itivuttaka* (p.085)
- 〈4〉一人の比丘が阿難のところに来て、世尊が提婆達多を「悪趣・地獄に1劫住して救うことができない (āpāyiko nerayiko kappatṭho atekiccho) 」と記別されたのは、ご自身の存念によられたものなのか、あるいは天神の告げたものかと質問した。阿難は世尊にこれを告げた。世尊は提婆達多に毛の先端ほどの白法を見ればそのような記説はしなかったと説かれた。AN.006-006-062 (vol.III p.402)
- 〈5〉釈尊は500人の比丘らと共に迦蘭陀竹園に住された。ときにある比丘は「提婆達兜比丘者有大神力有大威勢。云何世尊。記彼一劫受罪重耶」と質問した。世尊は「ほんのわずかでも善法があれば、そのように記別しない。それ故に若し利養心が生じたならば、滅することを求めなさい」と教誡された。『増一阿含』011-010 (大正02 p.567中)
- 〈6〉釈尊は比丘たちに、「利養は人を無上道に至らせない。婆羅留支王子⁽¹⁾が提婆達兜に日頃500釜の食事を供養していた。このため提婆達兜は五逆罪を犯し、身壞命終して摩訶阿鼻地獄中に生まれた。それ故に比丘らよ、若し利養心を生じていなければ、生じさせてはならない。すでに生じているならば、これを滅するべきである」と説かれた。『増一阿含』012-007 (大正02 p.570中)
- (1) 婆羅留支は阿闍世の異名: Balaruci (折指)
- 〈7〉提婆達兜は後悔の心を起こして重病を得、毒を十指の爪の甲に塗り、担がれて世尊を尋ねた。阿難は同情して会わせようとしたが、その時地中から大火風が起こって身を焼かれた。そのとき悔心を起こして「南無仏」と唱えようとして究竟しないで、「南無」と唱えたとき地獄に墮ちた。これを見た阿難は悲しんだ。そして「我等の門族は轉輪聖王の位に出で、然して提婆達兜は身王種に出でたり。もともと阿羅漢果を成じるはずだ。提婆達兜在地獄中。爲經歷幾許年歳」と言った。世尊は1大劫(賢劫)を経験し、それが終われば人身に復して、南無と号する辟支仏を成じる」と答えられた。目連はこれを阿鼻地獄に墮ちている提婆達兜に知らせた。『増一阿含』049-009 (大正02 p.804上)
- 〈8〉釈尊は比丘たちに「四大泥黎之人の人とは、末佉梨と帝舎と提婆達兜と瞿波梨である」として、「提婆達兜罪人者起謀害心向於如來。身壞命終墮阿鼻地獄中」と説かれ、この4種の人の罪は極めて重い。自ら意を尽してこのわずらいを遠離して、梵行を修する者を受け継ぐべし、と説かれた。『増一阿含』050-005 (大正02 p.810中)
- 〈9〉世尊は一人の比丘に、禰婆達兜を記別して「禰婆達兜当墮惡趣泥犁中住一劫難可救」と言ったのは、禰婆達兜に毛髪ばかりの白法もないからだと言われた。『阿耨風経』(大正01 p.854上)
- 〈10〉地獄の業を造るというのは、無慙無愧にして厭離せず、心に怖畏なくしてかえって歡喜を生じて懺悔せず、復た更に重ねて増惡の業を造ることであって、提婆達多等の如くである。『仏為首迦長者説業報差別経』(大正01 p.893中)

〈11〉 調達愚人は如来を害せんと欲し、阿羅漢比丘尼を殺し、比丘僧を壊亂し、身壞命終して三惡道に趣き、阿鼻地獄中に生ず。『仏説四泥梨經』 (大正02 p.861 中)

以上のうち、提婆達多が現身に地獄に落ちというものは〈7〉であり、命終後地獄に落ちというものは〈6〉 〈8〉 〈11〉であり、釈尊が地獄に墮ちると記別されたというものは〈1〉 〈2〉 〈3〉 〈4〉 〈5〉 〈9〉である。〈10〉ははっきりしない。

[1-3] B 文献資料には次のものがある。

〈1〉 (ガヤーシーサから 500 人の比丘を舍利弗・目連が連れ戻した後) デーヴァダッタの病は9ヶ月続いた。そしてついに彼は釈尊に会いたいと強く願ったので、彼の弟子は彼を担架に載せて釈尊の所へ運んだ。竹林内の蓮池の堤で担架から降り、足を地に着けたとき彼の足は地中に沈んだ。最初は踵まで、次は膝、胸、首まで沈み、ついに顎まで沈んだ時、彼は帰仏の偈を唱えた。……後に釈尊は提婆達多の徒に次のように話されたと伝えられている。「彼が俗人のままで出家帰仏しなければ、重罪を犯した以上、未来の存在 (āyatibhava) は期待できないが、出家帰仏するならば、いかに重罪を犯そうと未来の存在を期待することができる。そして百千劫の後に (satasahassakappamatthale) アッティッサラ (Aṭṭhissara) という名の独覚 (paccekabuddha) になるであろう」と。*Dhammapada-A.* (vol. I p.146, Burlingame 訳 Book1-12 vol. I p.239)

〈2〉 「比丘よ、三の非正法によって征服されてデーヴァダッタは地獄に行く……」と説かれたきっかけは何か。デーヴァダッタがアヴィーチ大地獄に入った時に、デーヴァダッタの徒党と外道らが「沙門ゴータマによって呪われて、デーヴァダッタは大地に入った」と非難した。それを聞いて教説を信じない人々は「これはきっと彼らが語る通りであったのだろう」と疑った。その経緯を諸比丘は世尊に告げた。そこで世尊は「諸比丘よ、如来は如何なる者も呪ったりしない。それゆえデーヴァダッタは私に呪われたのではない。自身の業だけによって地獄に入ったのである」と言って、かれらの邪な見解を防止して、このきっかけによりこの経を説いた。*Itivuttaka-A.* (vol. II p.099)

〈3〉 「大王よ、この世で大地に没入した人々は何人ありますか」「尊者よ、バラモンの娘チンチャー、釈迦族のスッパブッダ、長老デーヴァダッタ、夜叉ナンダカ、バラモンの青年ナンダです。これらの5人は大地に没入しました。」「大王よ、かれらは誰に対して罪を犯したのですか」「尊者よ、尊き師または彼の弟子に対してです」*Milindapañha* (p.101, 『ミリンダ王の問い』1 東洋文庫7 p.291)

〈4〉 大王よ、デーヴァダッタは死ぬ時に臨んでブッダに帰依したのです。大王よ、もしも一劫を6分するならば、デーヴァダッタがサンガを破壊したのは第1分を過ぎた時なのです。残りの5部分を地獄において過ごした後、そこから脱してアッティッサラと名づける独覚 (Aṭṭhissaro nāma paccekabuddho) になるでしょう。*Milindapañha* (p.111, 『ミリンダ王の問い』2 東洋文庫15 p.008)

〈5〉 大王よ、デーヴァダッタは幾百千生の間、尊師に対して憎悪を懐きました。かれはその憎悪によって高殿ほどもある大石を放ちました。それらの破片が尊き師の御足に落ちたことによって、忘恩邪慳なデーヴァダッタが地獄に墜ちて苦しみを受けることになりました。*Milindapañha* (p.179, 『ミリンダ王の問い』2 東洋文庫15 p.148)

〈6〉 (デーヴァダッタとブッダとの優劣) 「尊者ナーガセーナよ、あなた方は『デーヴァ

ダッタは全く邪悪であり邪悪の性質をすべて備えている。これに反して、菩薩は全く清浄であり清浄の性質をすべて備えている』といます。しかるにまた、デーヴァダッタは過去のもろもろの生存を通じて、名声においても信徒の数においても、菩薩と全く同じであり、かえってある場合には勝っていました。いま現在、両者とも釈迦族に生まれました。菩薩はブツダとなり、全知者にして世間の指導者です。デーヴァダッタはそのブツダの無比最上の教えにおいて出家したのち、神通を現わしてブツダになろうとの野心を起こしました」……「大王よ、デーヴァダッタはこの生存において危害を加えるべきでないブツダに危害を加え、また和合しているサンガを破壊して大地に没入しました。」

Milindapañha (p.200、『ミリンダ王の問い』2 東洋文庫 15 p.202)

〈7〉この物語は、提婆達多が世尊に瞋恚を抱いて9ヶ月がたち (*āghātaṃ bandhitvā navamāsaccayena*)、祇園精舎の門のところで大地に落ち込んだ時に (*paṭhaviyaṃ nimugge*) 人々が喜んだことに関連して話されたものである。*Jātaka 240 Mahāpiṅgala-j.* (vol. II p.239)

〈8〉この物語は、仏が祇園精舎におられたとき、提婆達多が大地に入ったこと (*paṭhavipavesana*) について話されたものである。*Jātaka 404 Kapi-j.* (vol. III p.355)

〈9〉この物語は、仏が祇園精舎におられたとき、提婆達多が大地に入ったこと (*paṭhavipavesana*) について話されたものである。比丘たちは提婆達多は嘘をついたので大地の中に落ち込んで無間地獄に生まれた (*paṭhaviṃ pavitṭho avīciparāyano jāto*) と噂した。……*Jātaka 422 Cetiya-j.* (vol. III p.454)

〈10〉世尊は「提婆達多は今世において我が法輪に害を加えて地中に没入したが、前世においても法輪に害を加えて地中に没入し、無間地獄に生まれた (*paṭhaviṃ pavisitvā avīciparāyano jāto*) 」と過去の話がされた。*Jātaka 457 Dhamma-j.* (vol. IV p.100)

〈11〉二大長老に弟子を連れ去られ提婆達多は口から熱血を吐き、病に苦しんだ。そして如来の徳を思いだして、「9ヶ月の間如来に対して不利益を考えた。しかし世尊と80人の大長老は彼に悪意をもたなかった。親族の長上であるラーフラ長老からも、釈迦族の王家からも捨てられた。世尊にお詫びしよう」とコーサラの町に到着した。阿難が取りなしたが世尊は会おうとされなかった。提婆達多が祇園精舎の門のところにある蓮池にやって来たとき悪果は頂点に達して、大地が口を開いて無間地獄の炎が噴き出し、提婆達多は如来の徳を想起しながら地獄に墮ちた。*Jātaka 466 Samuddavāṇija-j.* (vol. IV p.158)

〈12〉提婆達多は「自分こそ仏になるのだ (*ahaṃ buddho bhavissāmi*)。沙門ゴータマはもう自分たちの阿闍梨でもなければ和尚でもない (*mayhaṃ samaṇo Gotamo n' evācariyo na upajjhāyo*) 」と考えた。禅定を失った彼は破僧をして (*saṃghaṃ bhinditvā*)、舎衛城にやってきたとき、祇園精舎の間近で大地が口を開いて彼を無間地獄に飲み込んだ。*Jātaka 474 Amba-j.* (vol. IV p.200)

〈13〉この本生物話は、仏が祇園精舎におられたとき、提婆達多が嘘言を言って地中に没入したこと (*paṭhavipavesana*) について話されたものである。*Jātaka 518 Paṇḍara-j.* (vol. V p.075)

〈14〉 調達は舎衛城の仏に会いに行った。阿難が取りなしたが世尊は会われなかった。調達は魚の口のように開いたところから噴き出す炎に飲まれ、悪趣に堕ちた。そのとき大声で仏を呼んだので、仏は舍利弗目連などの諸々の比丘を地獄に派遣した。『仏本行経』「調達入地獄品」(大正04 p.100中)

〈15〉 色声香味触を食らず、禁戒を持すならばよく道を取る。しかし提婆達多のごとく多く誦経すると雖も、造悪毀戒ならば阿鼻獄に堕ちる。『賢愚経』(大正04 p.381上) 判明する範囲でこれらの言うところを整理すれば、〈3〉 〈6〉 〈8〉 〈9〉 〈10〉 〈12〉 〈13〉 〈14〉 は生身のまま地獄に堕ちたとするものであり、また 〈1〉 〈7〉 〈11〉 は生身のまま地獄に堕したとするのは同じであるが、それは破僧から9ヶ月後であったとしている。そして多くは南方伝承であるが漢訳の『仏本行経』も、生きながら地獄に堕ちた場所は舎衛城であって祇園精舎の門のそばであったとする。『仏本行経』は祇園精舎については言及しないが、釈尊に会いに行ったときのこととするのであるから、状況は南方伝承に等しい。

[1-4] 以上のように、提婆達多はおそらく破僧が最大の悪業となつて、破僧がなされた時点で、あるいはその9ヶ月ほどの後に地獄に落ちたとされ、説話化が進むにつれて、それは生身のままのことであつて、大地が口を開けて飲み込まれたとする傾向が強くなったとすることができよう。もちろんこれらは現在の原始聖典を伝えた系統の教団の、したがって提婆達多を大悪人とする系統の伝承であることはいふまでもない。

[2] 以上のように提婆達多の死は、現在の原始聖典を伝えた系統の伝承として、墮地獄に関連して語られる。しかしながら彼と彼のグループは破僧の後にも存続して、活動を続けたものと考えられるが、その系統の伝承を伝える文献が伝えられていないので、その詳細を知ることはできない。

しかしながら、仏滅後800~1000年経過してインドを旅した中国僧たちが、その旅行記に提婆達多の教えを受け継ぐ一派が当時なお存在していたことを記録している。

[2-1] これを伝える資料には以下のようなものがある。

〈1〉 祇洹の東門を出て北方七十歩の道の西は、仏がむかし九十六種の外道と共に論議した処である。……また調達が毒爪で仏を害しようとし、生きながら地獄に入った処で、後世の人が皆これを標識している。……祇洹精舎をめぐって十八の僧伽藍があり、ことごとく僧が住んでいるが、唯一処だけ空である。この中国には九十六種の外道があり、みな今世・後世を知り、各々徒衆がある。彼らもみな乞食するが鉢を持たない。……ただ期するところが異なるのみである。調達にも衆がいて常に過去三仏は供養するが、ただ釈迦文仏のみは供養しない。法顕記『高僧法顕伝』(大正51 p.860下)

〈2〉 羯羅拏蘇伐剌那国⁽¹⁾は周囲四千五百里ある。……伽藍は十余所、僧徒は二千余人おり、小乗の正量部の法を習学している。天祠は五十余所、異道の人々が非常に多い。別に三伽藍があり、乳酪を食せず提婆達多の遺訓を遵守している。玄奘訳・辯機撰『大唐西域記』(大正51 p.928上)

(1) 水谷真成訳注『大唐西域記』3 東洋文庫657 p.223、註(1)によれば、羯羅拏蘇伐剌那国はガンジス河西岸 Murshidabad 県の Rāṅgāmāṭi に比定されている。これはガンジス河がベンガル湾に注ぐ河口にあるタムルークから西北に行くこと700余里のところとされている。

(3) ここに随党というのは、提婆達多に随順する伴属をいう。非随党というのは仏弟子である。……現今も西方に在る処に、天授の種族の出家の流れがあり、あらゆる軌儀は多く仏法と同じである。五道輪廻、生天解脱、所習の三蔵の如くに至るまで大方同じである。大寺舎は無く、村樵間に居し、乞食自居し、淨行を多修し、胡蘆(ひょうたん)を鉢とする。衣はただ二巾、色は桑の皮のようで、乳酪を食べない。多く那爛陀寺に居て、諸典を雑え聴いている。かつて、彼に問うたことがある。「汝の軌式は多く大師(=釈尊)に似ているが、片寄ったり間違ったところがあり、また天授と同じである。天授の種曹ではないのか」と。彼は答えた。「私の祖とする所は天授にあらず」と。これは、人に嫌われるのを恐れて認めなかっただけであろう。義浄訳『根本説一切有部百一羯磨』(引用は義浄の割註部分) (大正 24 p.495 下)

ちなみに法顕は隆安3年(399年)に長安を出発して義熙8年(412年)に青州に帰着し、玄奘は貞観3年(629)に長安を出発して19年(645)に長安に帰り、義浄は咸亨2年(671)に広州を出発して嗣聖12年(695)に洛陽に帰った。これら中国僧がインドを旅行したときに、提婆達多の教えを遵守するグループが現実に存在していたことを見聞しているわけである。かれらは「常に過去三仏は供養するがただ釈迦文仏のみは供養しない」「乳酪を食せず、提婆達多の遺訓を遵守する」「大寺舎は無く、村樵間に居し、乞食自居し、淨行を多修し……、乳酪を食べない」とされるから、明らかに提婆達多の後継者なのである。

これらの提婆達多の残党に関する記述によれば、彼らがいた場所を『法顕伝』は中インドといい、『西域記』はベンガル地方といい、『根本説一切有部百一羯磨』の註は西方というのであるから、まさしく区々であって一定しない。もしこれらの記事が虚偽でないとするれば、提婆達多の残党はインド各地に残存していたことになる。

[2-2] しかしながらこれら後世の旅行記は、提婆達多を大悪人とする仏教本流の伝承も平等に伝えている。もちろんこれが多数派であったわけである。先に見たように、これらは提婆達多が舎衛城の祇園精舎の門の近くで大地が口を開けて提婆達多を飲み込んだとするのであるが、これらはこの伝承に基づくものをも記録している。

『大唐西域記』(大正 51 p.899 下)は次のように言う。

伽藍(給孤独園)の東百余歩の所に大深坑がある。是は提婆達多が毒薬で仏を害しようとして、生身で地獄に陥入した処である。提婆達多(唐言天授)は斛飯王の子で、精勤すること十二年、すでに八万の法蔵を誦持していた。後に利の為に神通を学び、悪友に親近し共に相談しあった。我相は三十で仏よりすこし少ないだけなのに、大衆が圍繞する様は何と如来と異なるのだろう、と。このように思惟して破僧を企てた。舍利子と没特伽羅子は仏の指図を奉じ、仏の威神を承じて説法誨諭したところ僧はまた和合した。提婆達多は悪心を捨てず、悪毒薬を指爪の中に置いて、作礼の際に仏を傷害しようと思った。まさにこの謀のを行わんとして遠くから来至したが、地が析けて、生きて地獄に陥ちたのである。

しかし同時に、『大唐西域記』(大正 51 p.921 下)は提婆達多のまじめな修行についても記述している。

毘布羅山(王舎城)の上に卒塔婆がある。昔、如来が説法された処である。今は露形外道が多くここに住み、苦行を修習して夙夜怠らず、夜の明け方より日の暮れるまで日

輪を観察している。山城の北門より左の南崖の北側を東へ行くこと二三里で大石室に至る。昔、提婆達多はここで入定した。

[3] 墮地獄の後、未来永劫地獄に住し救済されないとするものが多いが、最終的に辟支仏として成仏するものとして [1-2] の〈7〉『増一阿含』、[1-1] の〈6〉『根本有部律』、[1-3] の〈1〉 *Dhammapada-A.*、〈4〉 *Milindapañha* などがある (1)。

大乘経典の『法華経』「提婆達多品」(大正09 p.034下)は「提婆達多却後過無量劫、当得成仏、号曰天王如来、応供、正遍知」とする。これは悪人成仏を説くものとされてきたが、『法華経』中には提婆達多が大悪人であるとは記されておらず、むしろ過去世では釈尊の師匠であったとされている。

しかしこれらは本論の主題とするところとは直接に関係しない。

(1) 徳岡亮英「*Sivaka-dvāra* と *aṭṭhihi*」(『印仏研究』38-1 平成元年12月) p.278 参照。